

## 第9節 遺構外出土遺物

### 1 A区遺構外出土遺物(第132～134図、PL.46～47・76・77)

遺構に伴わない遺物として土器類は、A区では古墳時代中期から中世にかけての遺物が出土している。大半のものは、飛鳥時代から平安時代の遺物である。以下、図化したものについて触れることとする。

古墳時代のものは、わずかに土師器壺225、須恵器坏身238を図化した。225は天神川編年Ⅸ期ごろ、古墳時代中期末葉ごろのものと考えられる。238は内面底部に同心円当具痕を残すもので、TK209併行期、古墳時代終末ごろのものと考えられる。

飛鳥時代から平安時代のものは、土師器甕226、手捏ね土器小鉢227・228、ミニチュア土器高坏229、土師器甌把手230、須恵器坏蓋231～237、須恵器坏・高台坏239～247、須恵器高台付皿248・249、須恵器壺口縁部250・251、須恵器甕252、須恵器壺253～255、須恵器平瓶又は提瓶口頸部256、須恵器高坏257、須恵器窯関連遺物である須恵器甕片258、土馬268がある。

土師器類は、概ね奈良時代ごろのものと考えられ、226八峠編年奈良初期から前期に併行するものと考えられる。

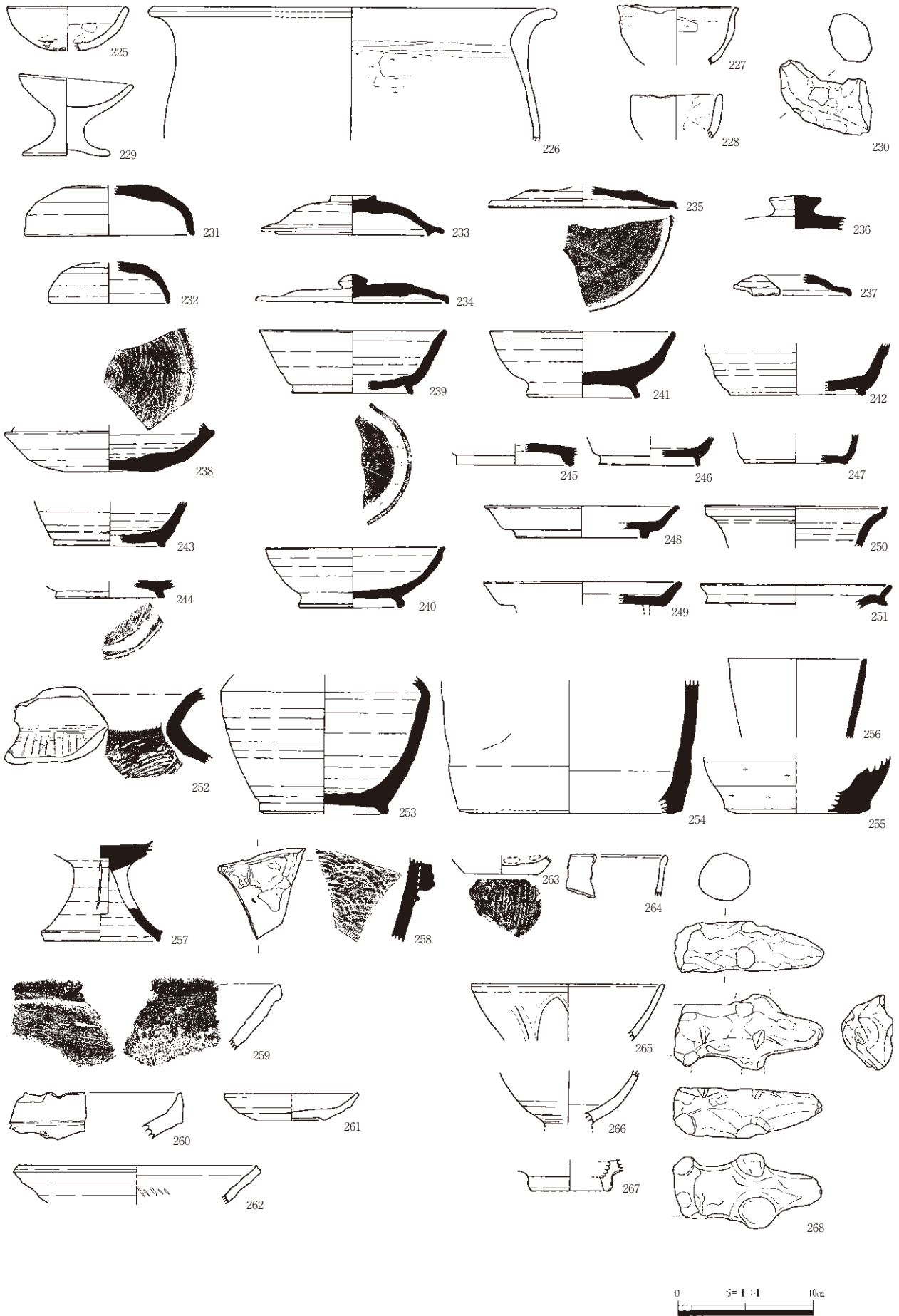
須恵器坏類のうち、坏蓋231はTK217併行期、232はTK46・48併行期と考えられる。輪状つまみにかえりをもつ坏蓋233はTK46・48併行期、かえりが消失し宝珠状つまみをもつ234～237は八峠編年奈良初期と考えられる。高台坏240・241は八峠編年奈良初期と考えられる。高台坏239・242・243は八峠編年奈良前期から中期ごろと考えられる。高台坏皿248・249、壺253も八峠編年奈良前期から中期ごろと考えられる。高坏257は脚部2方に切れ目状透かしをもつもので、TK46・48併行期と考えられる。

外面に窯壁片が付着する甕258、器壁が発泡している須恵器壺底部255は、後述するB区でも多量に出土した須恵器窯関連遺物である。A区に須恵器窯関連施設があったとは考えられないことから、B区から何らかの関係で移動したのものと考えられる。

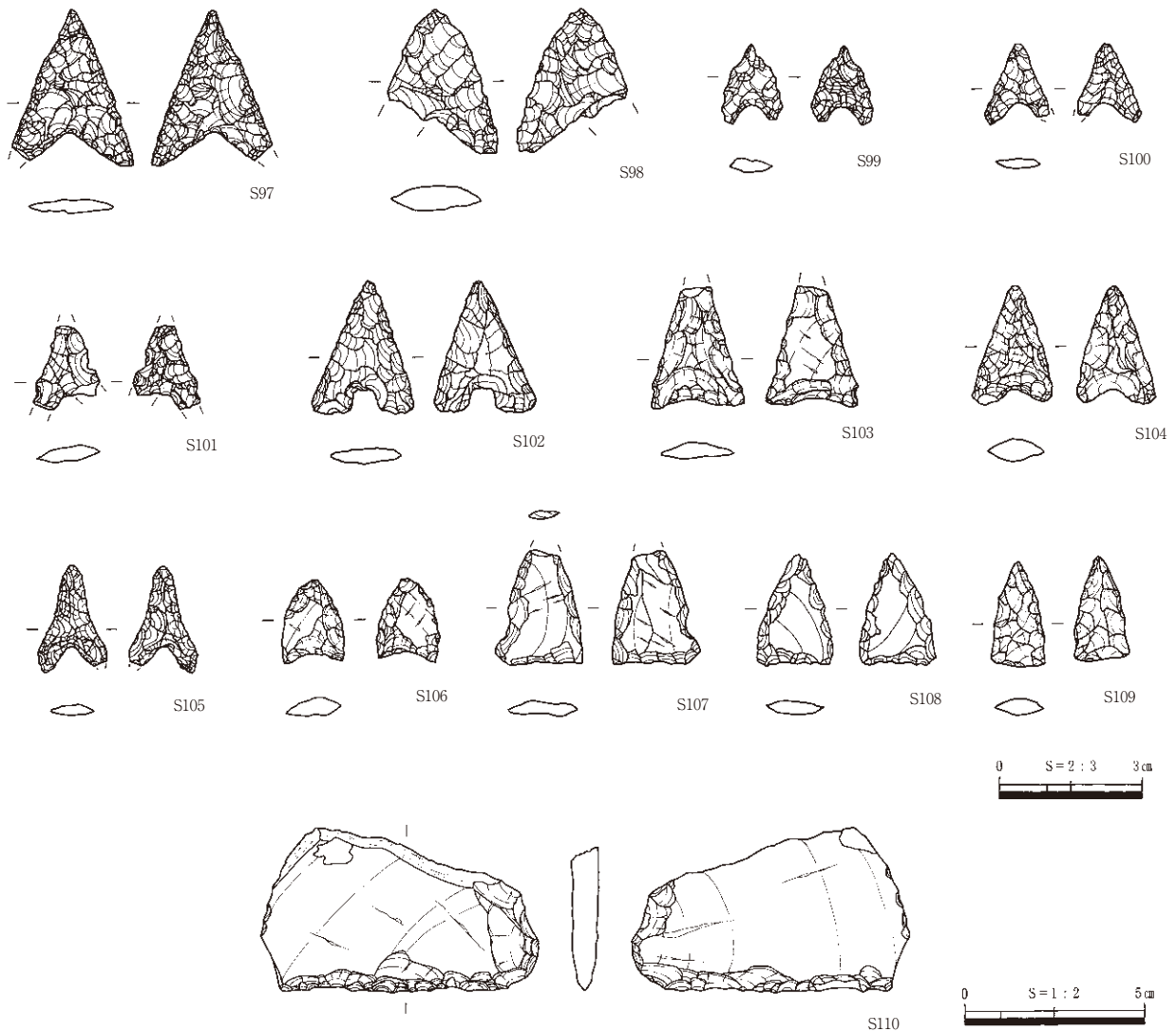
土馬268は、頭部及び脚を欠き、尾部が太く表現され鞍の表現がないものである。後述するC区斜面部から出土した土馬に比べて形骸化しており、時期的にやや下るものと考えられるが、他の出土遺物から奈良時代のものと考えたい。

中世以降の遺物も出土しており、瓦質土器鉢259、備前焼播鉢片260、瀬戸美濃焼丸壺261、卸皿262、土師質土器坏263、青磁碗264～267を図化した。259は15世紀ごろ、260は備前Ⅳb期、261・262は大窯期のものと考えられる。265は鎬蓮弁が線描される龍泉窯系のもので14～15世紀ごろ、その他の青磁碗は15～16世紀ごろのものと考えられる。

その他石器類も出土しており、図化したものには、黒曜石製凹基無茎石鏃S97～S101、サヌカイト製凹基無茎石鏃S102～S106、サヌカイト製平基無茎石鏃S107～S109、磨製石斧S111～S113、砥石S114～S117、泥岩製硯模製品S118、玄武岩製敲石S119、安山岩製磨石S120がある。磨製石斧のうちS111・113は頁岩製、S112は結晶片岩製である。砥石のうちS114・115は流紋岩質凝灰岩製、S116は細粒花崗岩製である。S118は小型の硯模製品と考えられ、海の部分を線刻で表現している。なお、サヌカイト製削器S110については、調査区一括として出土したものである。石器類の帰属時期は不明であるが、石鏃は縄文時代、硯模製品は中世以降に帰属するものと考えられる。



第132图 A区遺構外出土遺物(1)



第133図 A区遺構外出土遺物(2)

2 B区遺構外出土遺物(第135～142図、PL.47・49～56・69)

B区は、中世以降ウルミ谷川が礫で堆積した後に圃場整備まで水田として利用されていたと考えられるが、昭和50年代後半から60年代前半に圃場整備により造成工事が行われており、その際の攪乱土中(造成土中)に多量の遺物が包含されていた。ここでは、表土・造成土中出土遺物、造成前耕作土中(黒褐色粘質シルト層)出土遺物について触れる。

図化したものは、古墳時代前期から近世にかけての遺物、須恵器窯関連の溶着・変形した須恵器である。

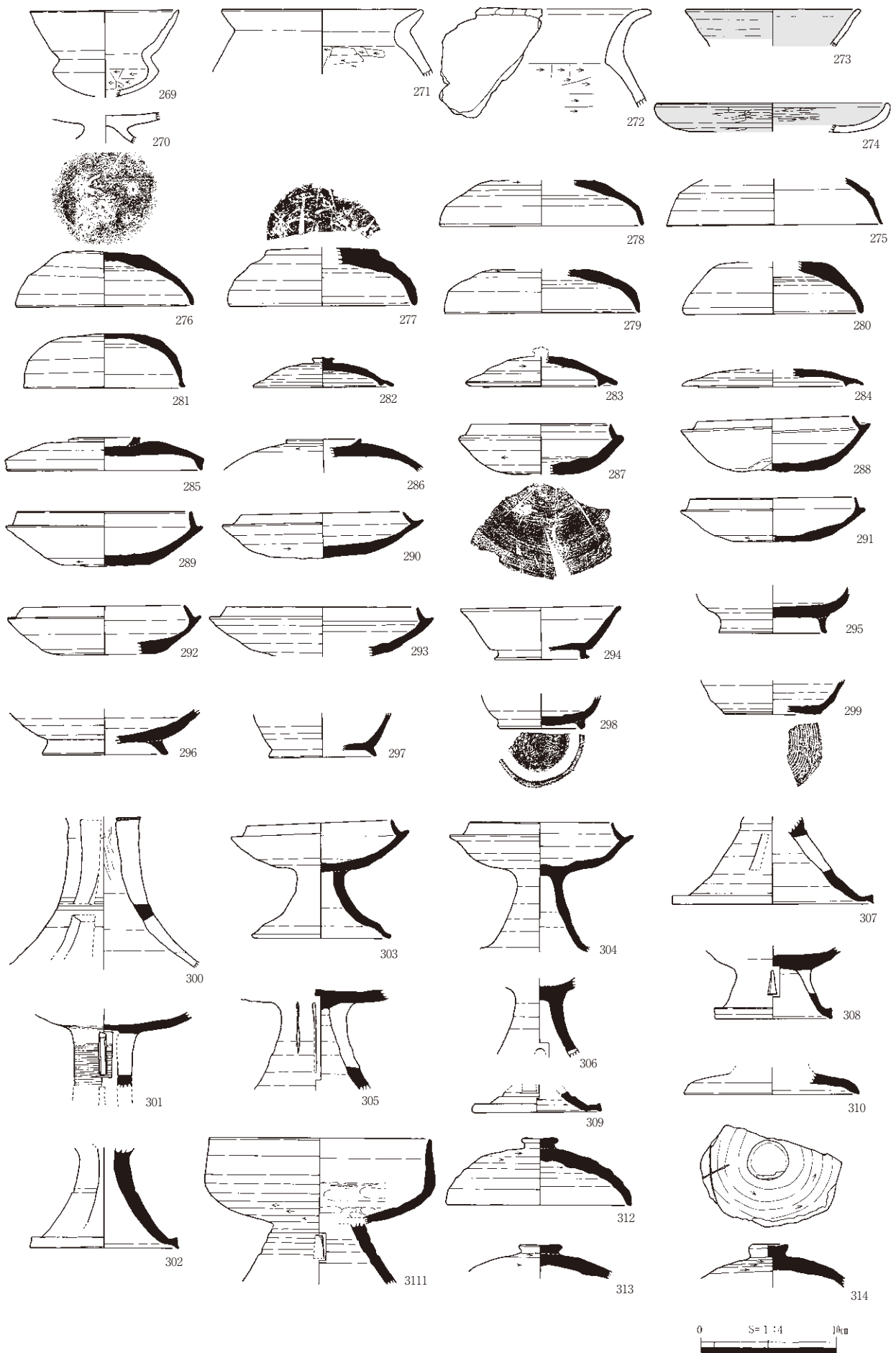
古墳時代前期のものでは、小型丸底鉢269、低脚坏270がある。269は口縁部が大きく開き、算盤玉形の扁平な体部をもつもので、天神川編年Ⅱ期ごろに帰属すると考えられ、270も同時期と考えられる。

古墳時代中期では、「く」字口縁をもつ甕271がある。天神川Ⅸ期以降と考えられる。

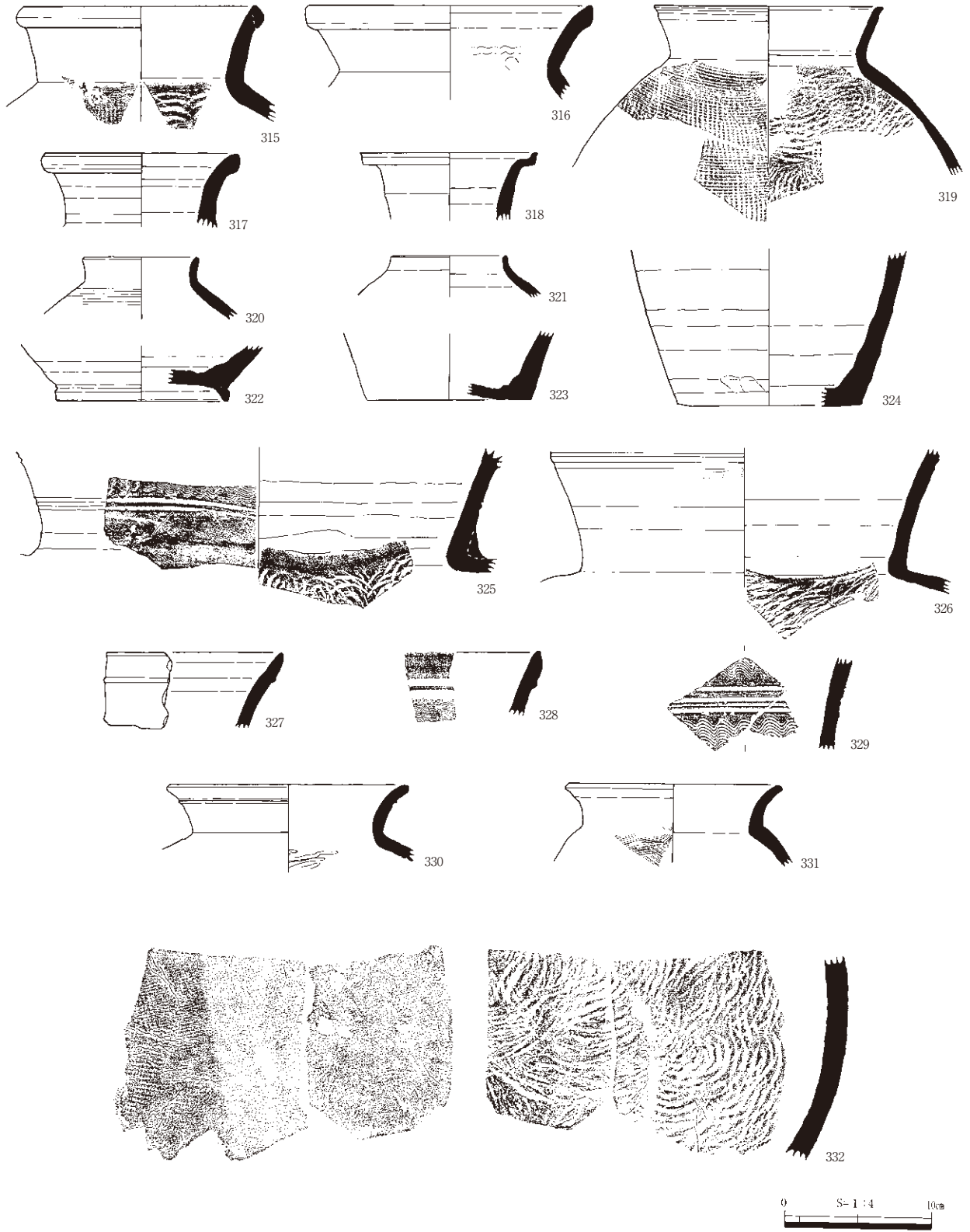
古墳時代後期から終末期のものでは、須恵器坏蓋275～281、須恵器坏身287～293、須恵器高坏脚部300～302、須恵器有蓋高坏303・304、須恵器有蓋高坏蓋312～314、須恵器壺315～318、須恵器短頸壺



第134図 A区遺構外出土遺物(3)

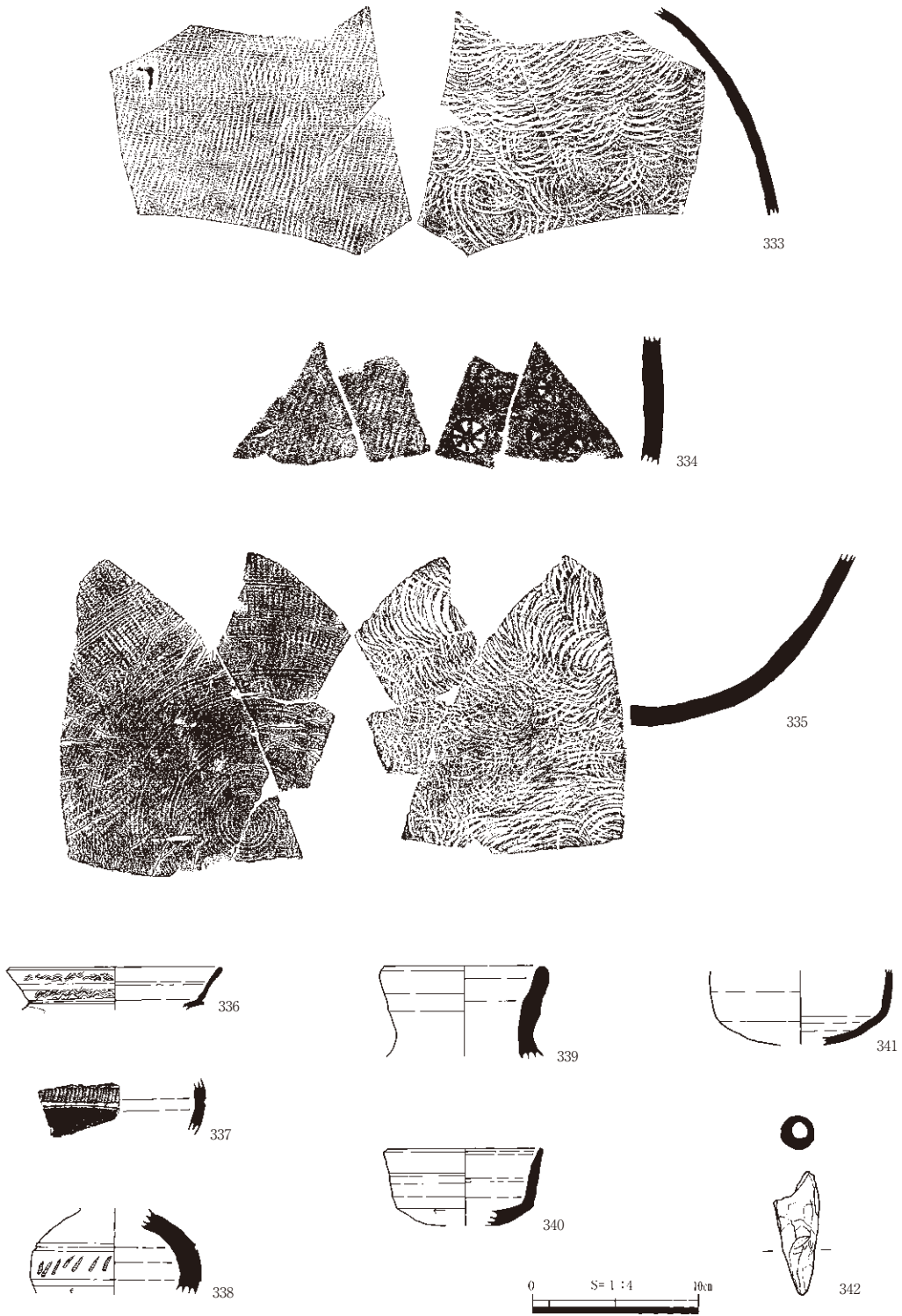


第135図 B区遺構外出土遺物(1)



第136圖 B区遺構外出土遺物(2)



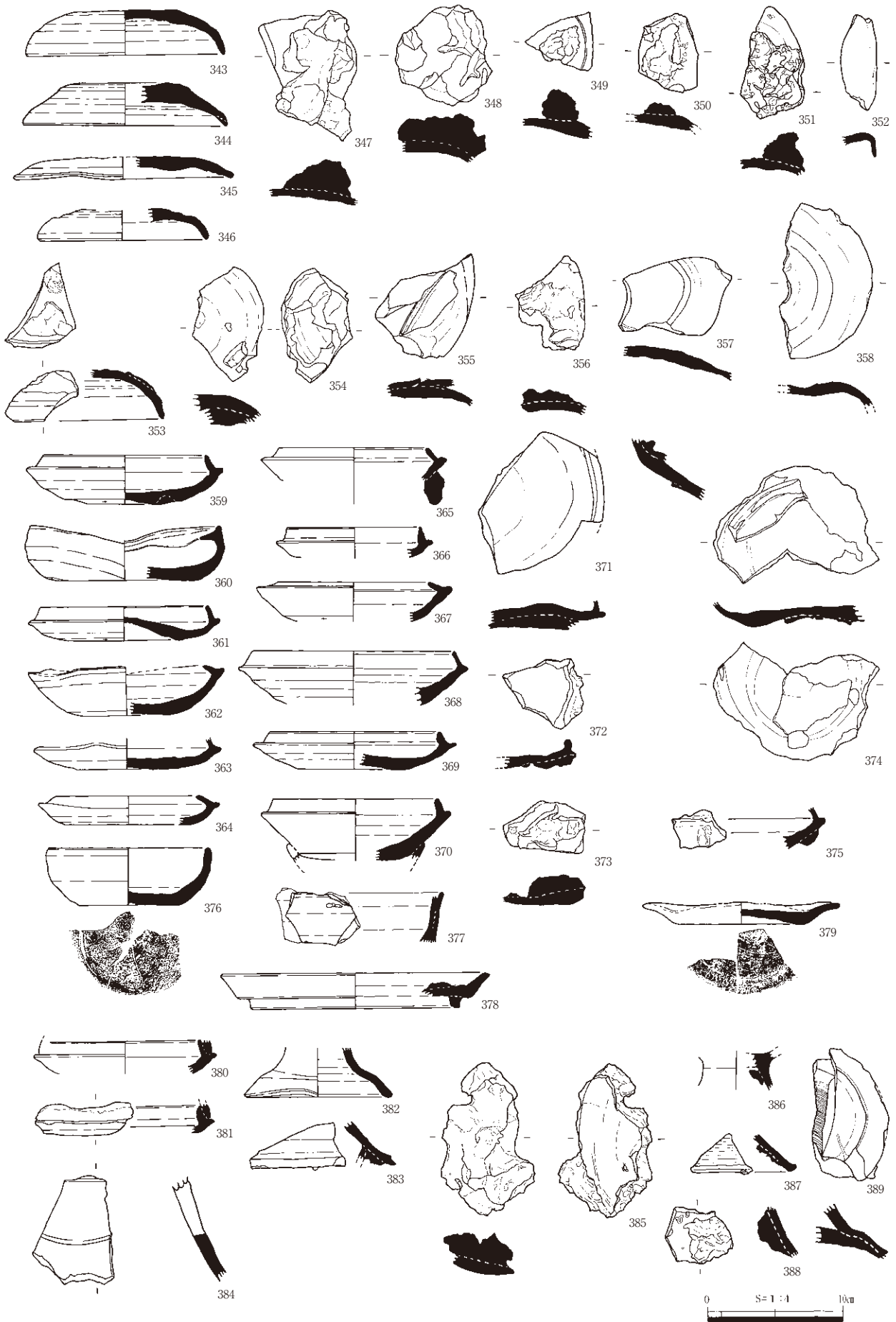


第137図 B区遺構外出土遺物(3)

319～321、須恵器甕325・326・329、須恵器甃336・337がある。

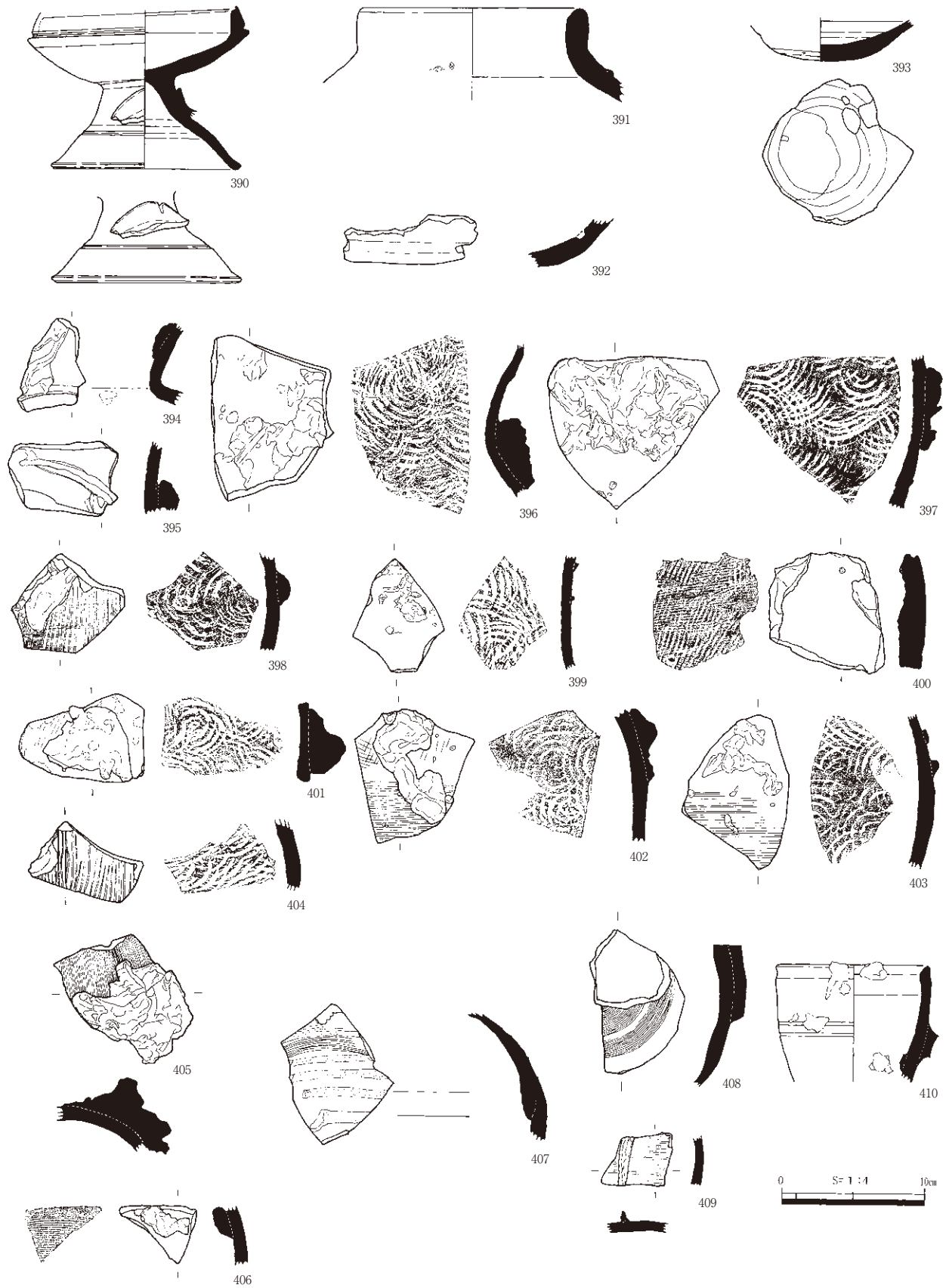
279は口縁部と天井部との境に明瞭な段が残るもので、TK43併行期と考えられる。その他の蓋坏類は、口径が11～14cm前後とやや大きく、天井部・底部は回転ケズリが施されるもので、TK209併行期と考えられる。高坏脚部300・301・307は長脚二段透かしとなるもの、302は一段透かしをもつもの、有蓋高坏303・304、有蓋高坏蓋312～314は、いずれもTK209併行期と考えられる。壺315～317、短頸壺319～321、甕325・326・329もTK209併行期と考えられる。

飛鳥時代から奈良時代のものでは、大きく外反する口縁部をもつ土師器甕272、全面赤色塗彩され

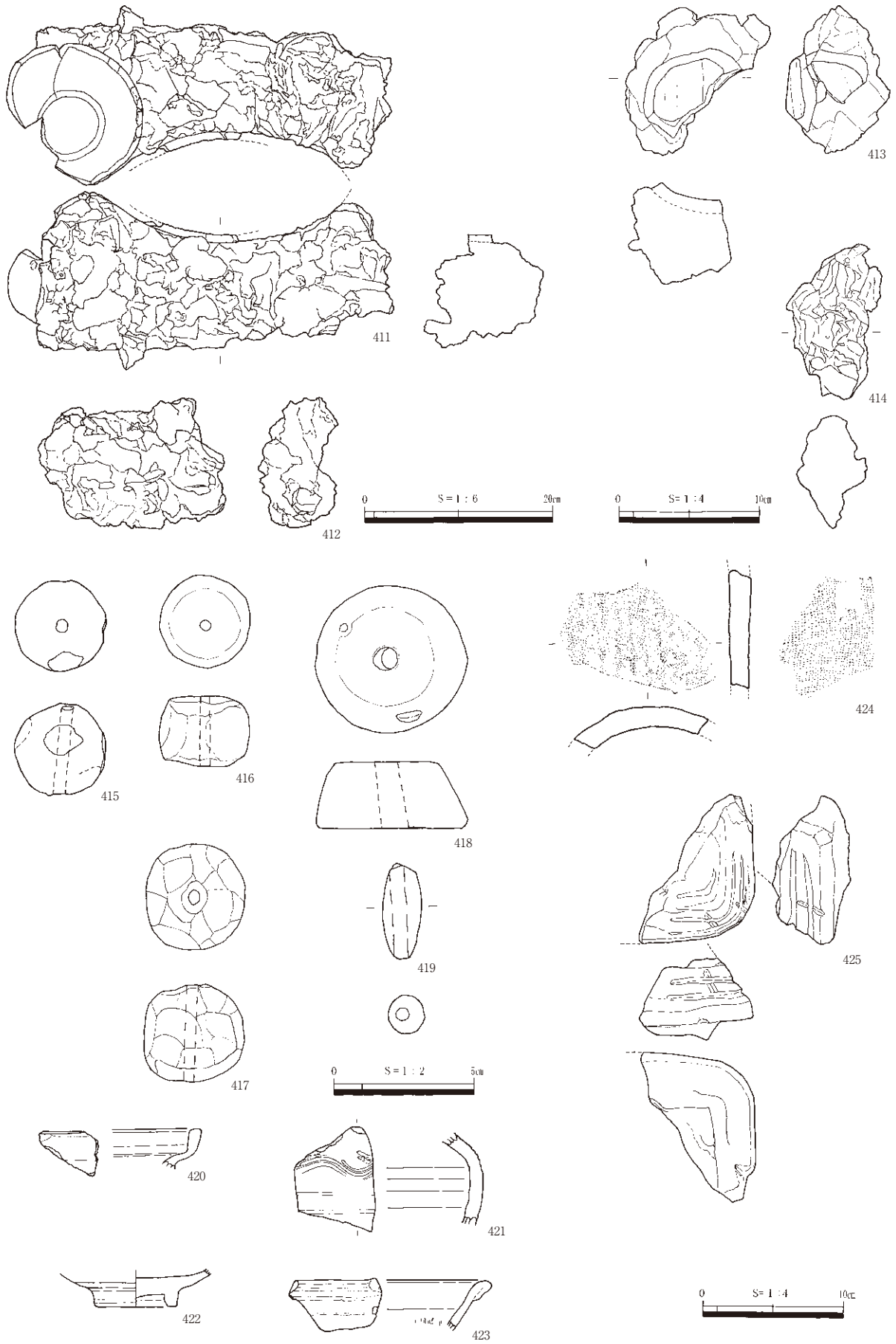


第138圖 B区遺構外出土遺物(4)

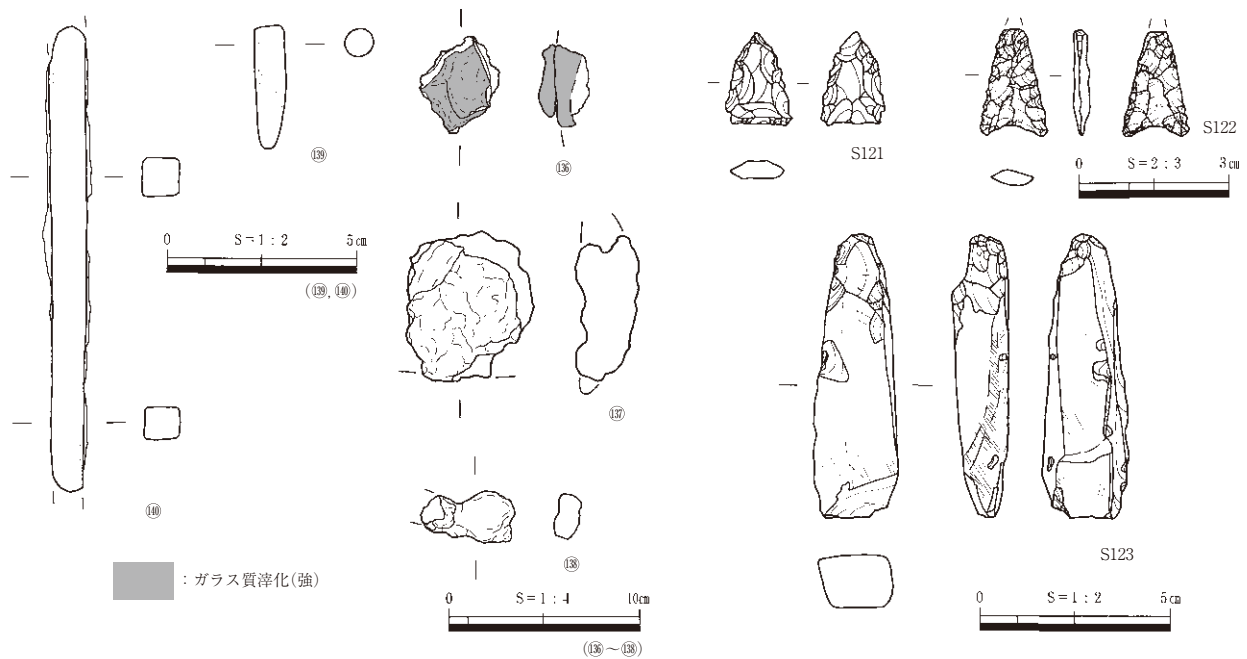




第139図 B区遺構外出土遺物(5)



第140図 B区遺構外出土遺物(6)



第141図 B区遺構外出土遺物(7)

る土師器坏273、土師器盤274、須恵器坏蓋282～286、須恵器高台坏294～298、須恵器坏299、須恵器高坏脚部305・306・308～310、塊状坏部をもつ須恵器高坏311、須恵器壺318、須恵器高台付壺底部322、須恵器壺底部323・324、須恵器甕327・328・330・331・332～335、須恵器甕338、須恵器平瓶又は提瓶口縁部339、須恵器塊340・341、須恵器角杯又は把手342、土錘415～417、陶製紡錘車418、丸瓦片424、瓦塔基部と考えられる425がある。

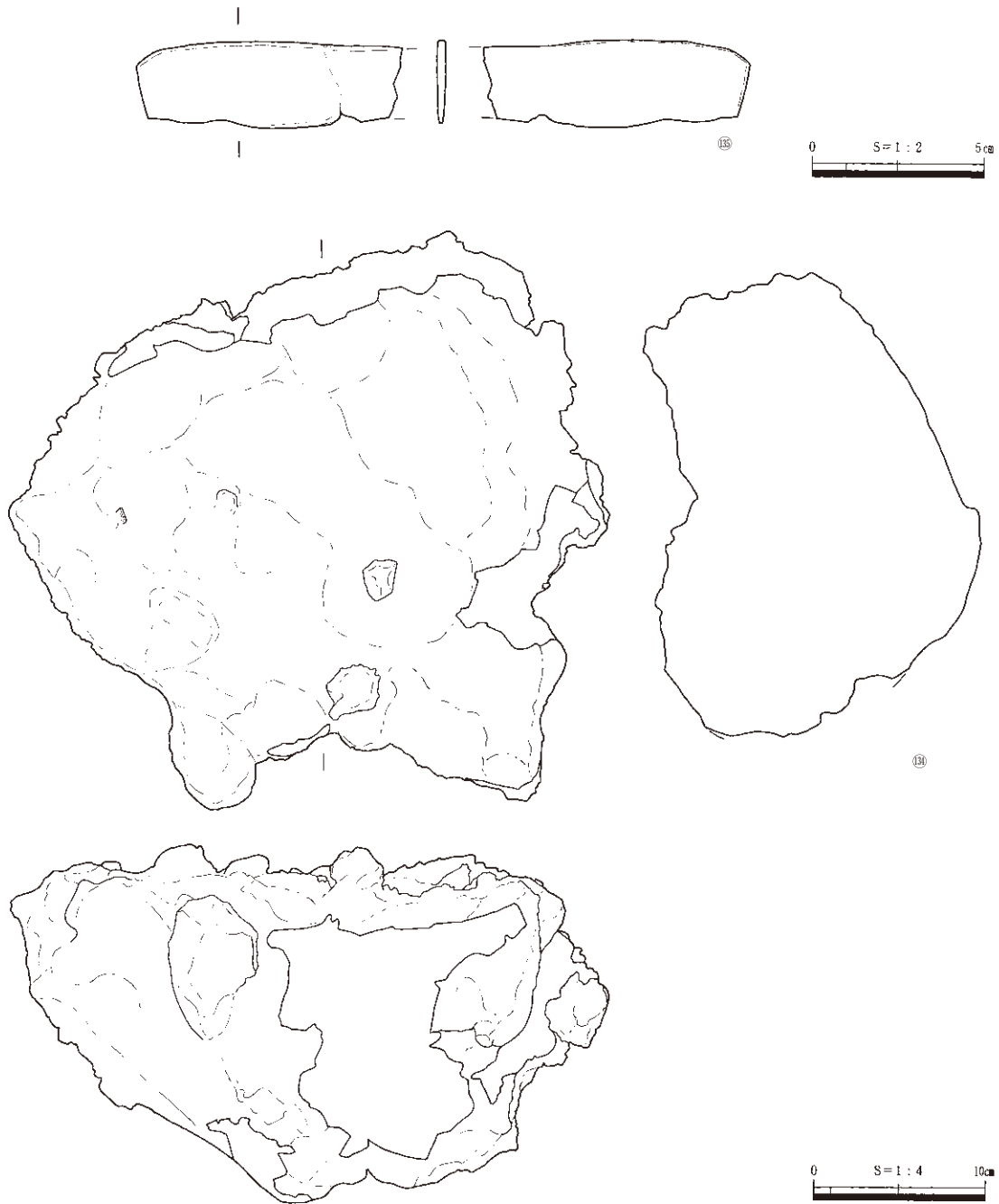
土師器甕272は大きく外反する口縁部をもち、奈良時代以前、飛鳥時代ごろのものと考えられる。宝珠状又は輪状つまみにかえりをもつ須恵器蓋282～286、高坏脚部305・306・308・309についても、TK46・48併行期、飛鳥時代ごろのものと考えられる。甕338は、TK217併行期と考えられる。甕は、外面平行叩き後カキ目、内面同心円当具痕が残るものが大半であるが、334は内面車輪文当具痕が施されるものである。

赤色塗彩された土師器は奈良時代ごろ、須恵器高台坏類は八峠編年奈良初期から前期、須恵器坏299は八峠編年奈良中期から後期と考えられる。

詳細な時期は特定しがたいが、丸瓦424は凸面布目が施される。凸面布目丸瓦は、後述するC区斜面部から主に出土しており、転落遺物と考えられる。また、瓦塔基部と考えられる425は、隅部分の破片で傾斜した側面隅に2本の横方向の沈線による表現が施され、内側に柱又は壁の表現と考えられる柱状又は板状の粘土が充填される。底面は、方形のほぞ状の突起がつくものと思われ、なんらかの台に乗るような物であったと推定される。

中世以降のものには、瓦質土器鍋420、備前焼壺421、唐津焼碗422、須佐焼鉢423がある。瓦質土器鍋420は15世紀ごろ、備前焼壺421は重根編年V B期(16世紀後半)ごろ、唐津焼422・須佐焼鉢423は近世のものと考えられる。

その他、須恵器窯関連遺物として、溶着・変形した須恵器、窯壁等が付着した須恵器、須恵器片が付着した窯壁片が多数出土している。これらは、古墳時代終末期を中心に奈良・平安時代にかけてのものと考えられる。図化したものは、須恵器坏蓋343～358、須恵器坏身359～375、須恵器坏376・377、



第142図 B区遺構外出土遺物(8)

須恵器高台付皿378、須恵器皿379、須恵器高坏380～390、須恵器短頸壺391、須恵器壺底部392・393、須恵器甕394～404、須恵器提瓶405～409、須恵器把手付碗410、窯壁411～414である。

時期が判明するもののうち、TK209併行期、古墳時代終末期のものは坏蓋343～345・353、坏身359～375、有蓋高坏380・381・390、高坏382～384・389、提瓶類405～409である。

八峠編年奈良前期のものは坏376・377、高台付皿378、八峠編年奈良後期から平安初期のものは回転糸切底をもつ皿379である。

また、図化した須恵器窯壁のうち、411には提瓶や甕片が付着している。湾曲した形状をなしているが、これは甕体部外面に崩落した窯壁が溶着したためと考えられる。また、412・414にはスサが含まれている。

### 第3章 調査成果

調査区内では須恵器窯は検出されなかったが、これらの遺物がまとまって出土していることから、圃場整備で掘削された丘陵裾部に本来あったものか、または調査区周辺から流れ込んだものが圃場整備で造成土とともに移動したものと考えられる。いずれにしても、調査区周辺には古墳時代終末期(TK209併行期)から奈良・平安時代の須恵器窯(群)が存在している可能性は高いと考えられる。

鍛冶関連遺物や鉄製品もわずかに出土しており、図化したものには、板屋型椀形鍛冶滓<sup>⑬④</sup>、薄板状不明鉄製品<sup>⑬⑤</sup>、製錬系の補修痕跡がある炉壁<sup>⑬⑥</sup>、製錬系の流出溝滓<sup>⑬⑦</sup>、鍛冶系の流出孔滓<sup>⑬⑧</sup>、棒状不明品<sup>⑬⑨</sup>・<sup>⑬⑩</sup>がある。鍛冶関連遺物は、古代末ごろのものと考えられる。鉄製品は飛鳥時代から奈良時代にかけてのものか。

その他石器類もわずかに出土しており、図化したものにはサヌカイト製凹基無茎石鏃S121、黒曜石製凹基無茎石鏃S122、頁岩製砥石S123がある。これらの帰属時期は不明であるが、石鏃は縄文時代に帰属する可能性がある。

#### 3 C区遺構外出土遺物(第143～151図、PL.56～69・巻頭図版4)

C区の遺構に伴わない遺物については、飛鳥時代から奈良時代の遺物が大半を占めるが、縄文時代晩期から奈良時代にかけて、長期にわたる時代の遺物を図化した。

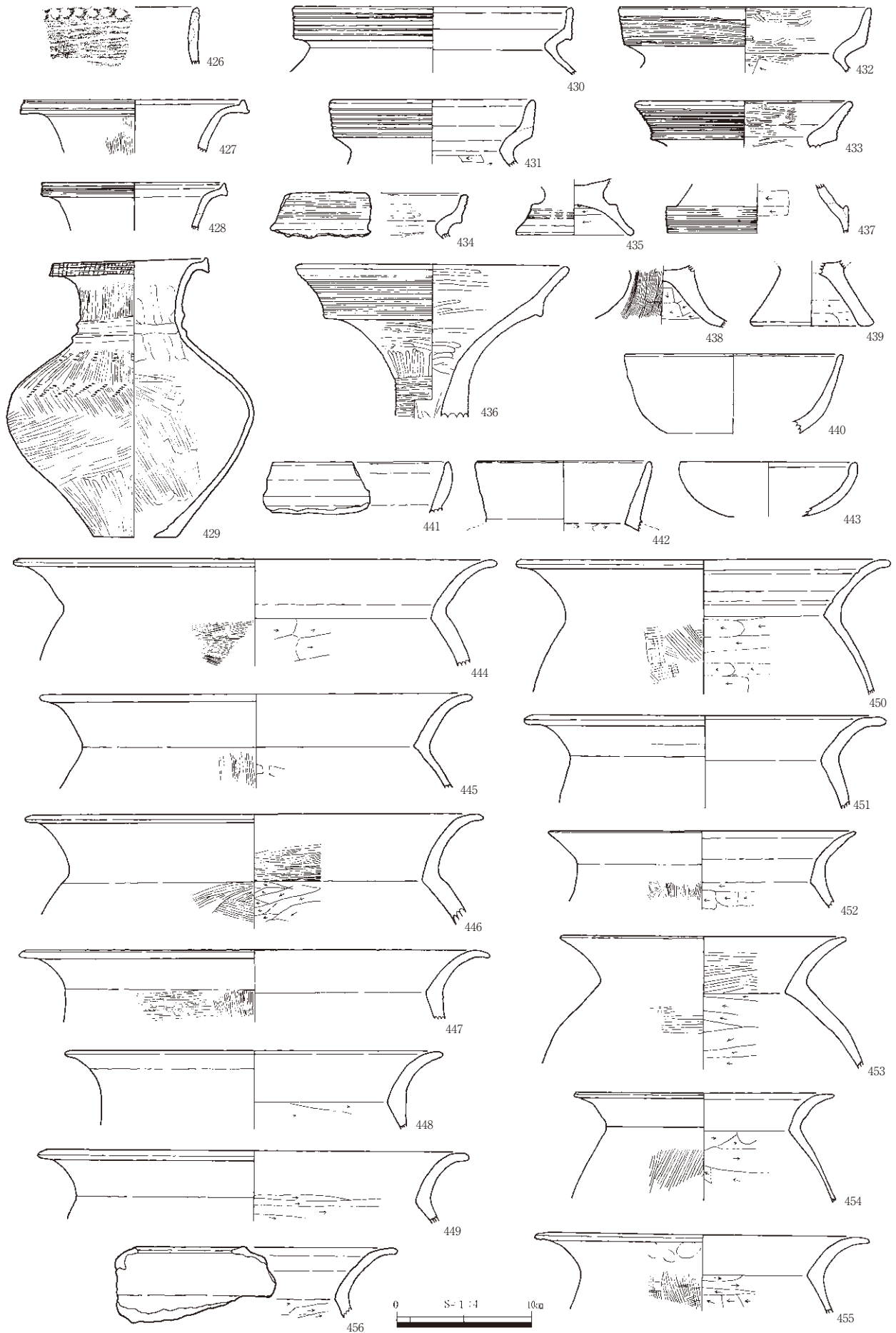
縄文時代晩期のものでは、口縁端部に刻み目をもつ粗製深鉢426がある。濱田編年晩期Ⅱ期ごろのものと考えられる。

弥生時代では、中期から後期のものが出土している。中期のものには清水編年Ⅲ-3様式、弥生時代中期中葉の小型壺427～429がある。429はほぼ完形に復元されるもので、出土位置が同時期の弥生時代中期中葉の遺構であるSS17の近辺であることから、この遺構から転落したものと考えられる。後期のものには、複合口縁をもち幅広の平行沈線が施される甕片430・431が清水編年Ⅴ-2様式、弥生時代後期中葉ごろ、複合口縁をもち多条化した平行沈線が施される甕片432～434、複合口縁状の脚をもつ台付壺435、多条化した平行沈線が施される鼓型器台436・437が清水編年Ⅴ-3様式、弥生時代後期後葉ごろのものと考えられる。詳細な時期は不明であるが、大型環状の甑把手499は、弥生時代後期の甑形土器の把手と考えられる。

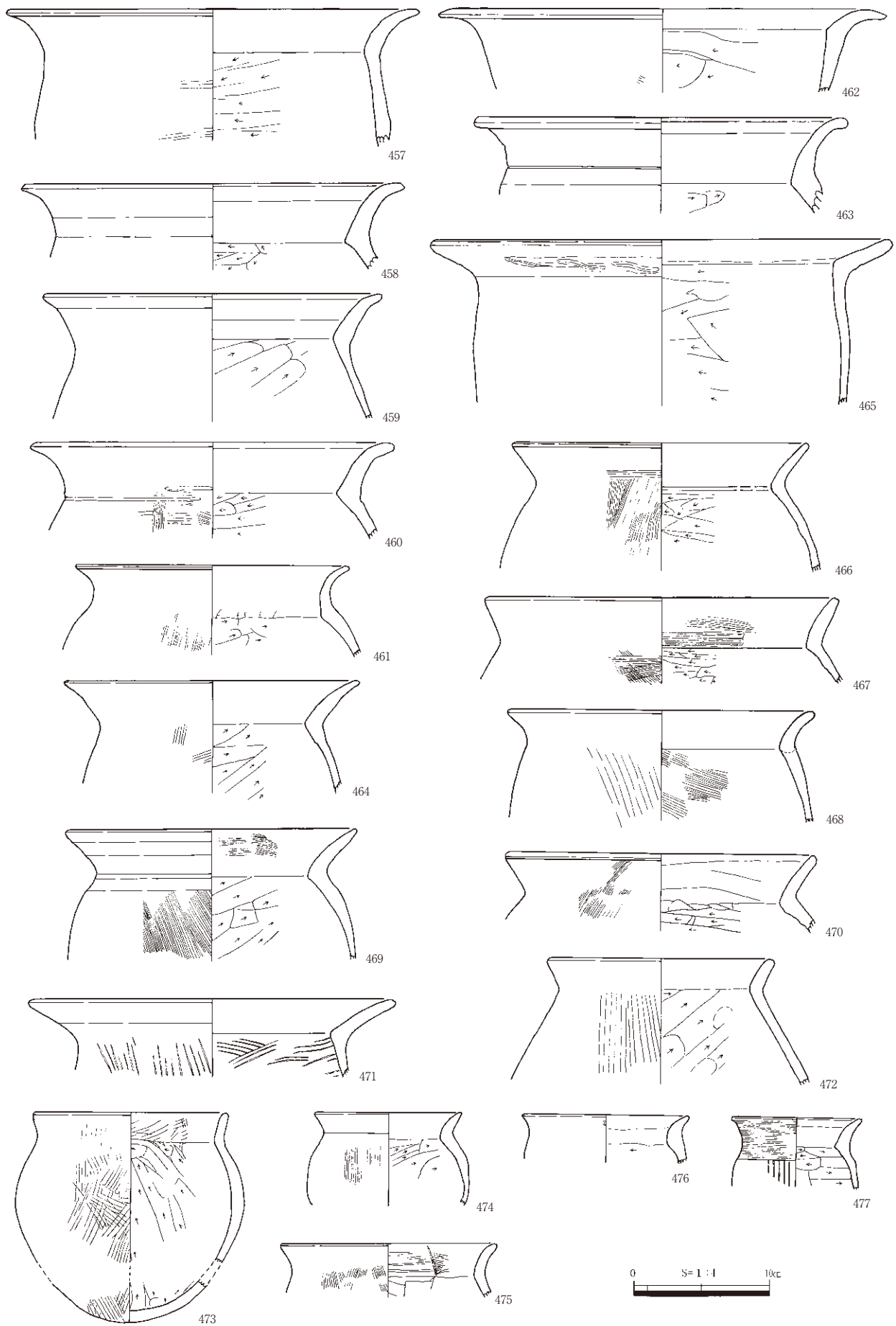
古墳時代では、前期・中期・終末期のものが出土している。前期では、短脚の高坏脚部438が天神川Ⅱ期、古墳時代前期前葉ごろのものと考えられる。同じく短脚の高坏脚部439も古墳時代のものと考えられる。椀状の坏部をもつ高坏440は、天神川Ⅳ期、古墳時代前期後葉ごろのものと考えられる。中期のものでは、布留甕に系譜をもつ退化した「く」字状口縁をもつ甕441、短い頸部をもつ直口壺442、やや浅くなった椀443が天神川Ⅸ期、古墳時代中期後葉ごろのものと考えられる。終末期では、TK209併行期の須恵器坏身514・515、有蓋高坏530がある。この他、赤色塗彩が施される土師器小型甕473も古墳時代のものと考えられる。

飛鳥時代から平安時代のものが最も多く出土している。土師器甕は口縁部が大きく外反する444～463、口縁部がやや厚手で外反度が少ない465～472、小型の474～477がある。土師器坏は内外面赤色塗彩が施され椀状の478～481、赤色塗彩がなされず皿状の482、内外面赤色塗彩が施される高台坏483、484は塗彩が認められない大型の椀、内外面赤色塗彩される椀485・486、底部回転糸切が施される487・488がある。489は手捏ねの小型鉢である。482は伯耆国序第3段階、10世紀代のものと考えられ、その他の坏類は奈良時代のものと考えられる。





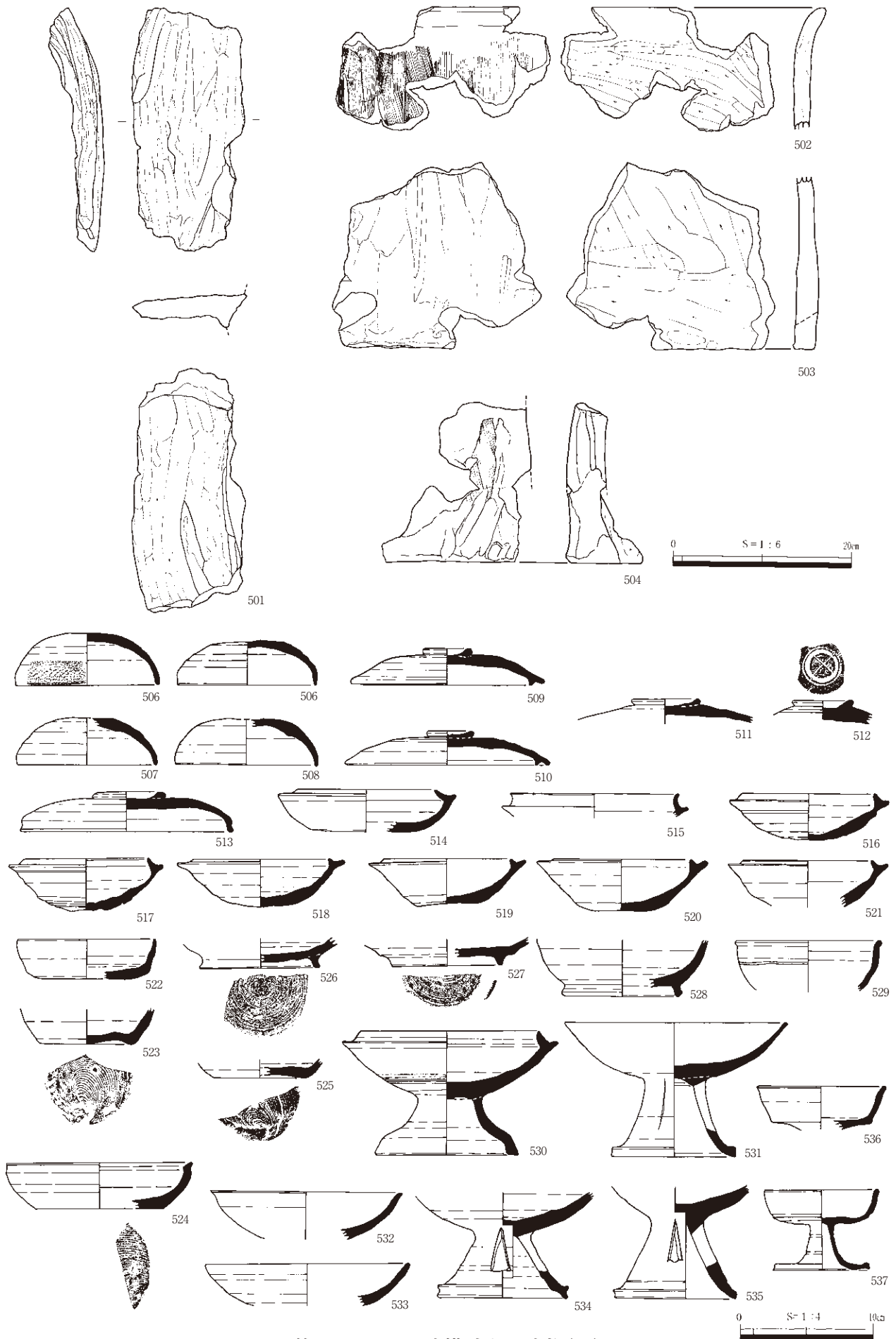
第143圖 C区遺構外出土遺物(1)



第144図 C区遺構外出土遺物(2)



第145圖 C区遺構外出土遺物(3)

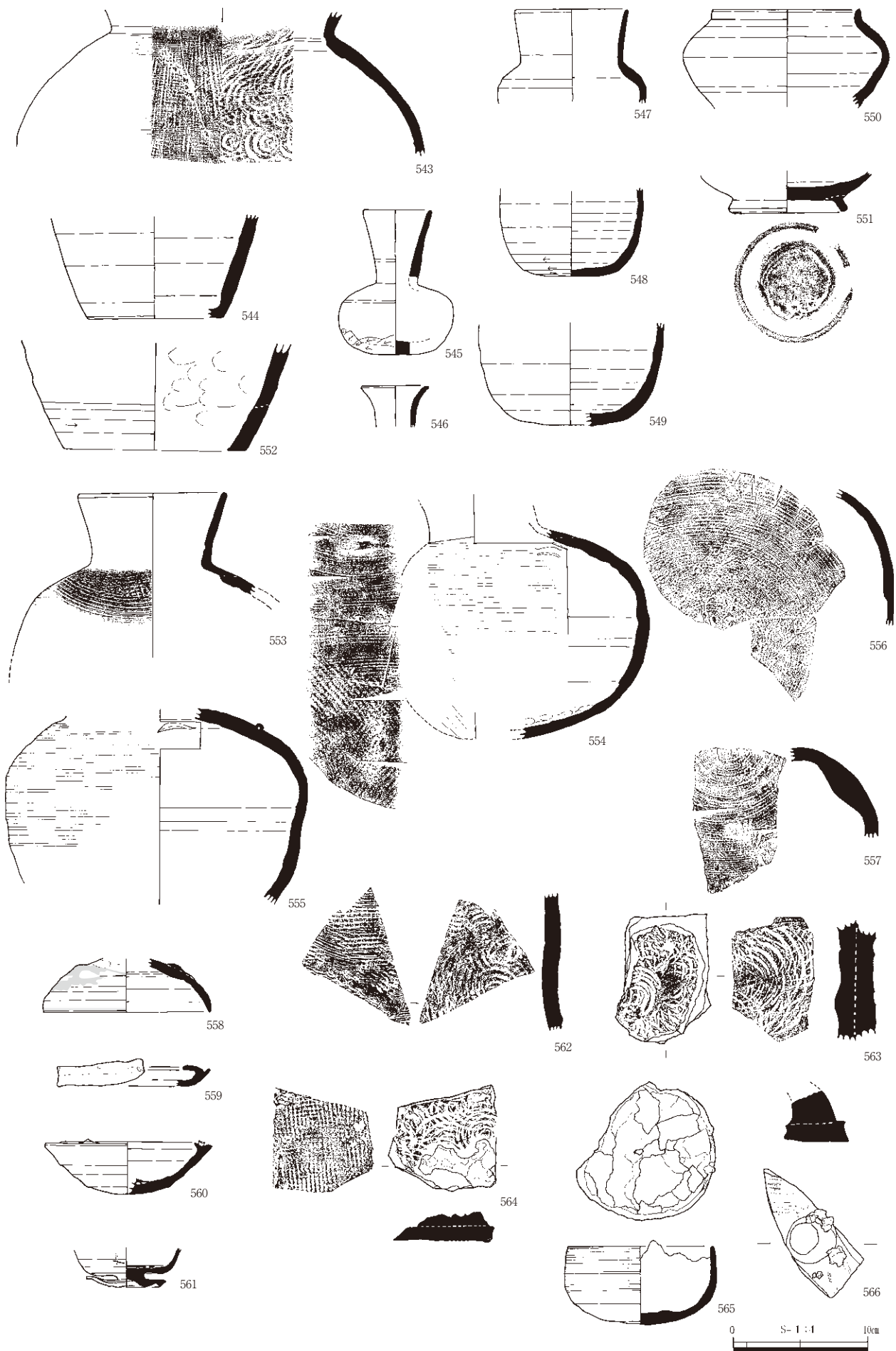


第146図 C区遺構外出土遺物(4)

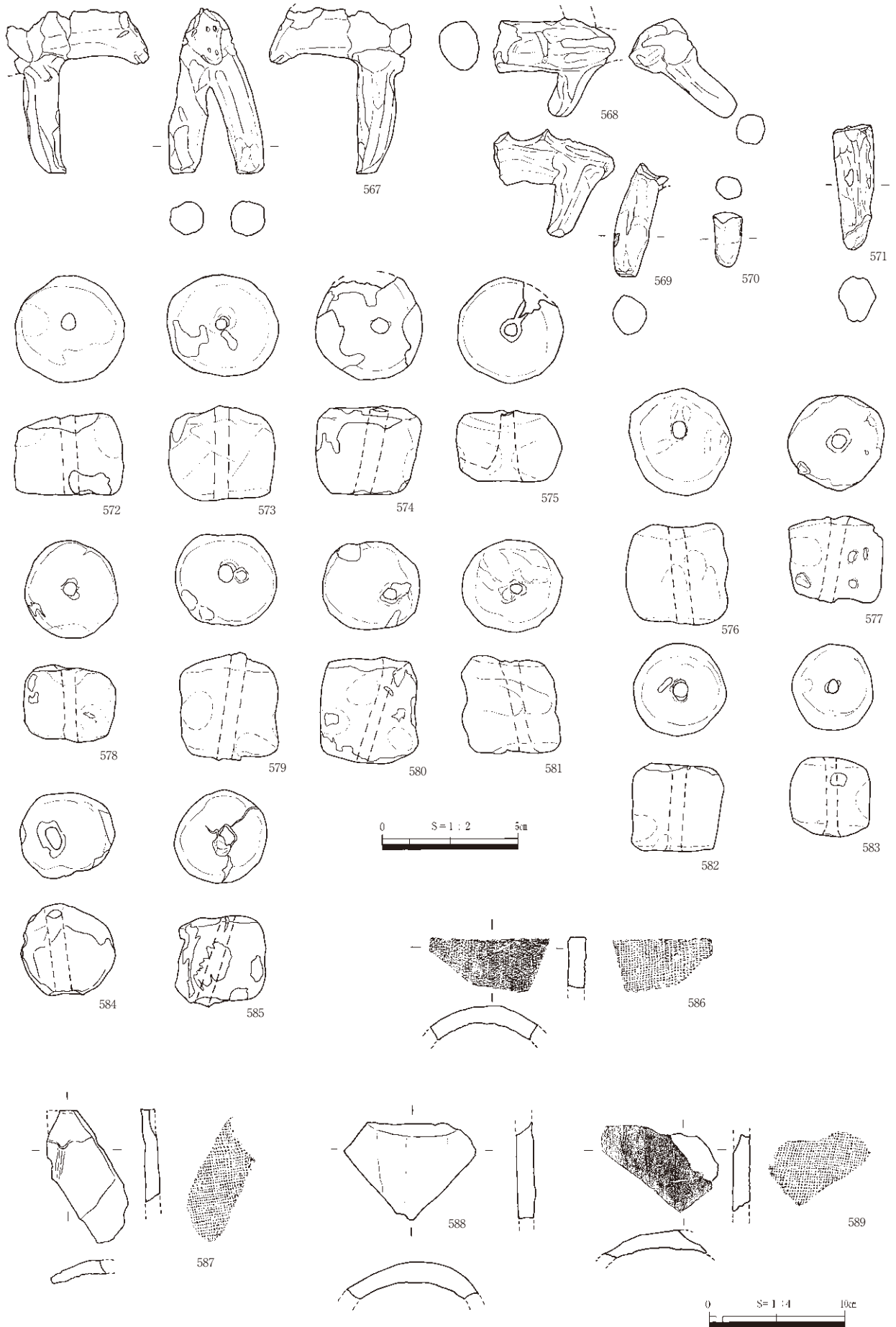


第147图 C区遺構外出土遺物(5)

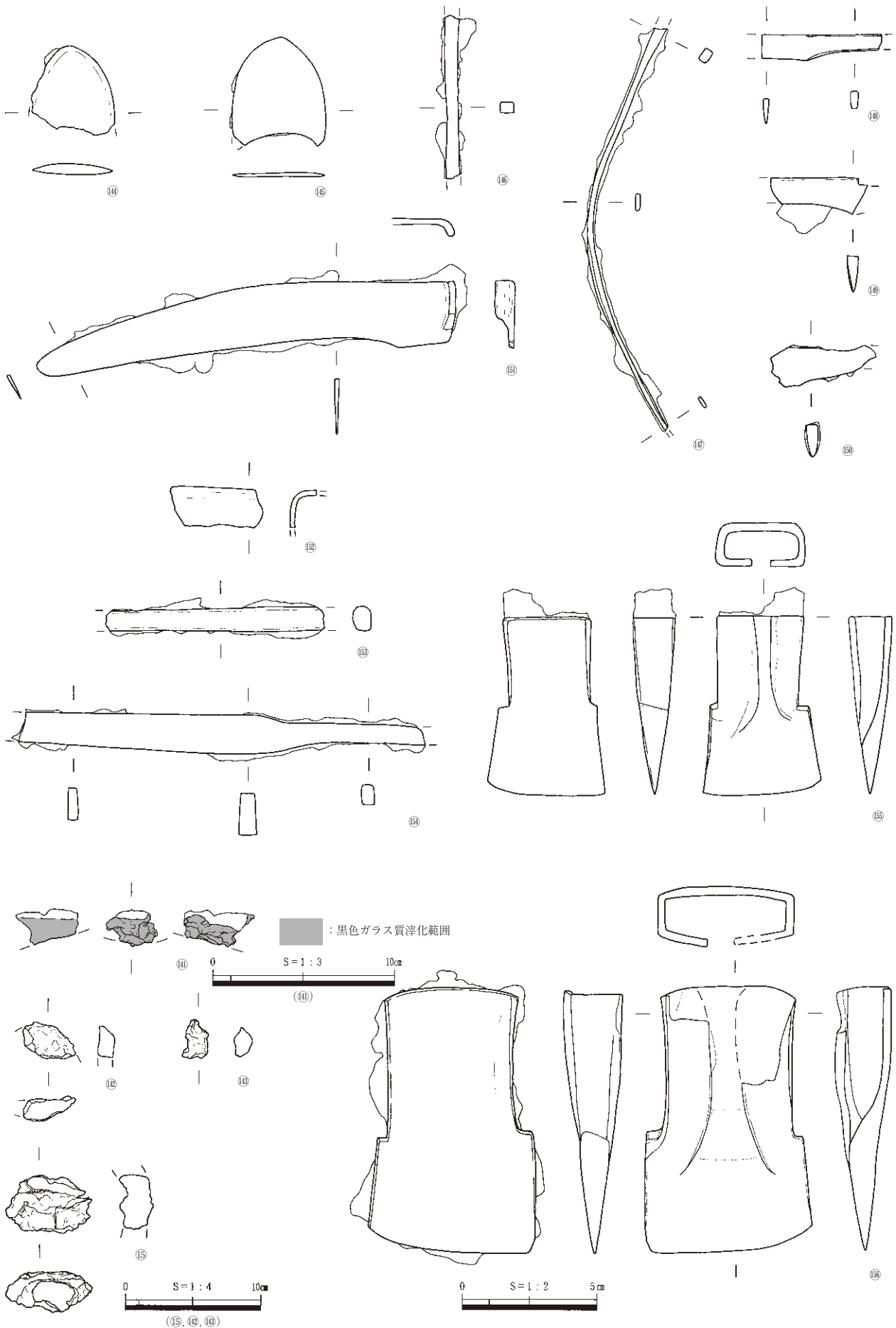




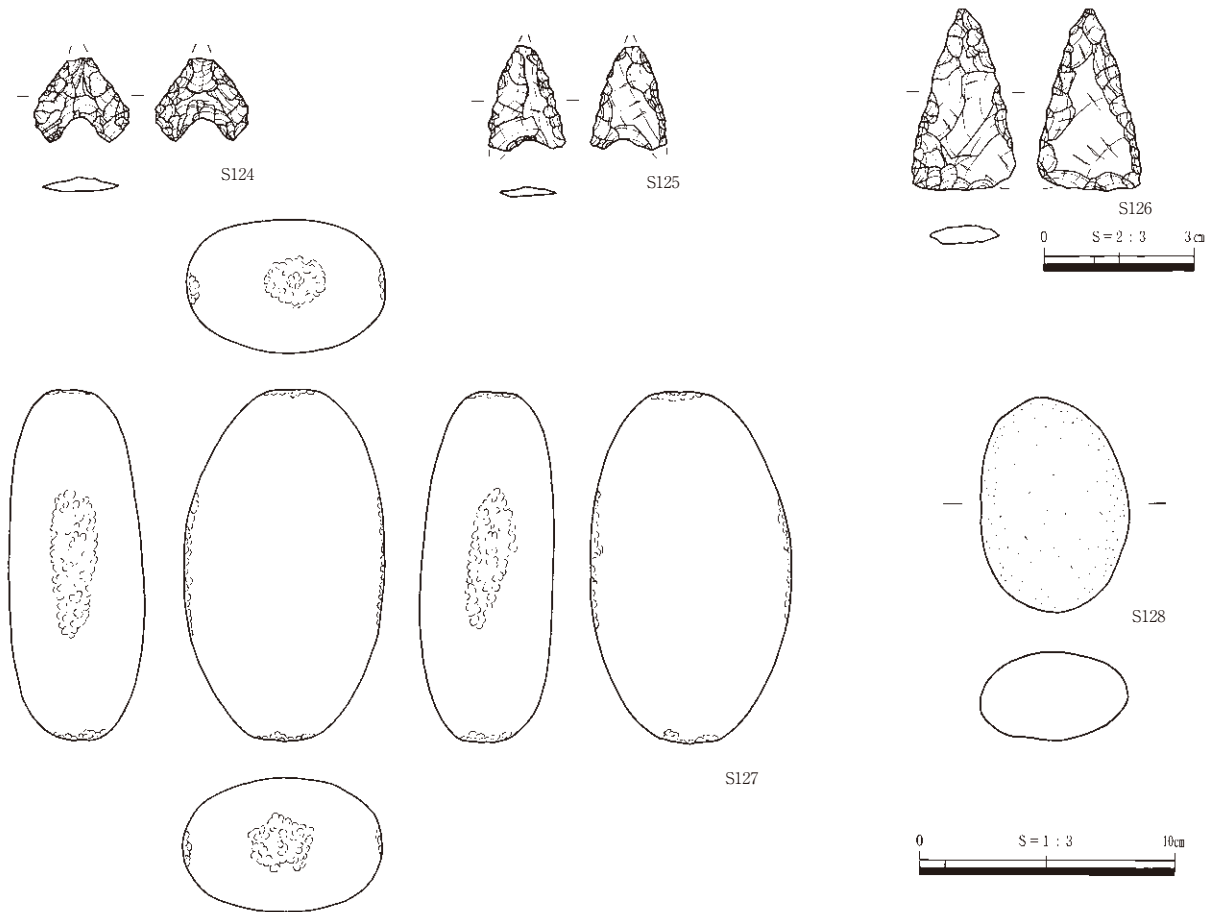
第148図 C区遺構外出土遺物(6)



第149図 C区遺構外出土遺物(7)



第150図 C区遺構外出土遺物(8)



第151図 C区遺構外出土遺物(9)

甗形土器490～497のうち、490は口縁部片、491・492は漏斗状の体部に角状把手をもち、狭口部に円孔をもつ。493も狭口部に円孔をもつ。495～497は角状把手で、497は薄手で大きく反り返る。498は土製支脚片と考えられる手捏ね土器である。500～504は移動式竈で、ある程度全形に復元できた中型の500、大型に復元できる底部片501、口縁部502、体底部503・504である。いずれも奈良時代のものと考えられる。

同時期の須恵器類には、TK217併行期の坏身517～519、TK46・48併行期の坏蓋505～512、坏身516・520～522、高坏531～535、小型高坏536・537、小型長頸壺545、直口壺547～549、短頸壺550、平瓶553～555、提瓶556・557、奈良時代の坏蓋513、坏523～525、高台坏526～528、壺底部544、小型長頸壺545・546、長頸壺547～549、短頸壺550、台付壺551、甗形土器552、平瓶553～555がある。詳細な時期は特定できないが須恵器甕538～543も飛鳥時代から奈良時代のものと考えられる。

また、変形・溶着した須恵器窯関連遺物、TK209併行期の坏身559、椀565、TK217併行期の坏蓋558、TK46・48併行期の坏身560、小型高坏561、甕562～563がある。これらは、斜面下方から出土しているが、さらに上方からの転落遺物と考えられ、C区斜面の中段から上段にかけて須恵器窯が存在していることを窺わせる。

また、土製品や瓦類も出土しており、このうち、祭祀関連のものとして土馬がある。567は頭部から前脚にかけての破片で、顔・鬣の表現がなされている。568は胴部から後脚にかけての破片で、鞍の表現があり飾り馬であったといえる。569～571は脚部の破片である。断面俵型の土錘572～585があ

### 第3章 調査成果

る。紡錘車の可能性もあるが、斜めに穿孔されるものがあることからここでは土錘として報告する。また、瓦片が4点出土している。いずれも丸瓦と考えられ、586は凸面に布目が施されるものである。凸面布目の丸瓦は周辺地域では上淀廃寺に出土例がある。時期は飛鳥時代から奈良時代のものと考えられる。

遺物包含層(黒褐色土から暗褐色土)からは、鉄器の他に鍛冶関連遺物がややまとまって出土している。大半は斜面下方部分から出土している。図化したものは、羽口⑭、含鉄の椀形鍛冶滓⑱、含鉄の極小椀形鍛冶滓⑲、薄板状不明鉄製品⑳、鉄鏃㉑、鉄鏃茎部と考えられる棒状鉄製品⑳、棒状不明品㉒・㉓、刀子㉔～㉕、鉄鎌㉖、環状不明品㉗、工具状不明品㉘、有肩鉄斧㉙・㉚である。これらの鉄関連遺物の詳細な帰属時期は不明であるが、斜面上方には、前述した鍛冶炉をもつSS8・SB2-2があることから、飛鳥時代ごろのものと考えられる。羽口⑭は銅素材の溶解に用いられたものと考えられ、鍛冶の他に銅小物の casting も行われていた可能性を示すものである。鉄器についても同様の時期が考えられるが、有肩鉄斧㉙・㉚については、同斜面部から古墳時代中期の土器も出土していることから、古墳時代中期に属するものと考えたい。

その他石器類も出土しており、図化したものには黒曜石製凹基無茎石鏃 S124、サヌカイト製凹基無茎石鏃 S125、サヌカイト製平基無茎石鏃 S126、安山岩製敲石 S127、デイサイト製磨石 S128がある。S127は両端に敲打面がある。これら石器の帰属時期は不明であるが、石鏃は縄文時代に帰属するものと考えられる。

煮炊具・供膳具としての土師器類・須恵器類及び土製品ともC区下方斜面部から出土したものが大半で、上方にある飛鳥時代の段状遺構等から転落したものと考えられる。

なお、須恵器小型長頸壺545内部の黒色物質の分析を行ったが、物質を特定することはできなかった(第4章第1節参照)。



文中写真10 現地説明会風景(1)



文中写真11 現地説明会風景(2)